

第二章 日本画家 小早川秋聲

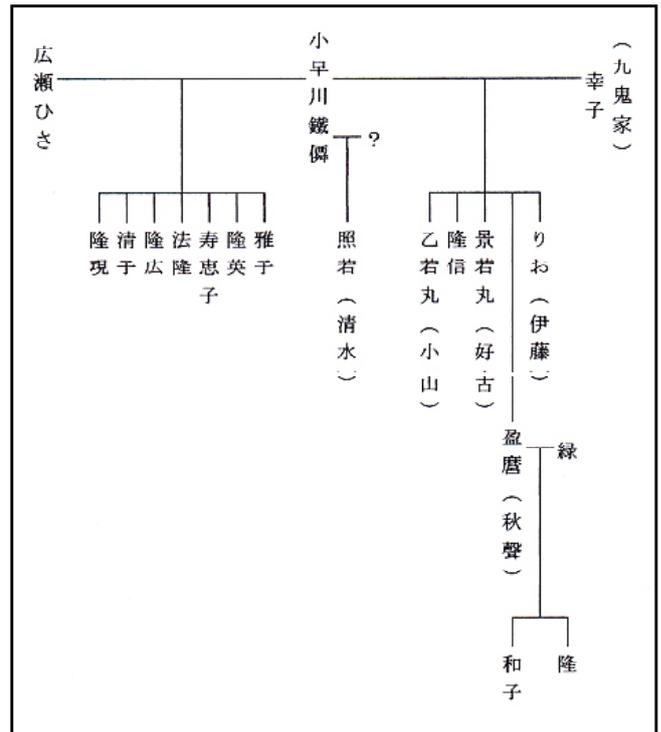
1 節 略歴

(1) 幼少から青年期まで

小早川秋聲（本名、盈麿（みつまる））は、明治18年（1885年）9月26日、鳥取県日野町黒坂光徳寺住職小早川鐵僊と元摂津三田藩主九鬼家ゆかりの幸子の長男として生まれる。家系図を下に掲載する。（学習院女子短短期大学平成元年度卒業長谷川有子氏の論文から引用）



(図11) 秋聲9歳の頃



(表2) 小早川秋聲の系図

秋聲は出生から、9年間は母親の里である神戸の九鬼子爵邸で育った。

幼少から、絵が好きで、「おやつはいらないから、紙をくれ」と言っていたというエピソードが残っている。（芸術新潮1995年7月号13p）また、おみやげに何が欲しいか聞かれた時にも「錦絵」を望んだという。（秋聲の長女である山内氏の談）

7歳の頃には、某南画家より四君子を習っている。（蘭、菊、梅、竹の四つの植物を「四君子」という。気品の備わったことを君子に見立てた言葉）

9歳より、東本願寺の衆徒として、僧籍に入る事となる。6年後、(明治33年)勤めを終えた父と一緒に光徳寺に帰郷する。父親は当時、東本願寺において高位の役職に就いていた。当然、秋聲を光徳寺の跡継ぎにと考えていたが、秋聲は僧侶となる事を嫌がっていた。

この年の冬、15歳の秋聲は、画家になる事を決意するが、父親の反対にあい、勘当同然の身で家を出て、母方の神戸にある九鬼家に身を寄せる事となる。

翌年、真宗大学寮（現 大谷大学）に入学する。

この頃の、秋聲の作品に「山中鹿之助三日月を拝する之図」が現存している。彼が17歳の頃の作品である。



山中鹿之助三日月を拝する之図 1902年(明治35年)頃 120×73

(図12)「山中鹿之助三日月を拝する之図」明治35年 黒坂小学校所蔵
明治38年、20歳の時、秋聲は京都の歴史画家、谷口香嶠に師事する。秋聲も歴史に題材を取った作品が多いのはこの影響かと思われる。



22歳（明治40年）の時に、1年志願兵として騎兵連隊に入隊し、1年後、予備役少尉となる。

1年志願兵制度とは、志願したのち、1年間の兵役に就き、退役後は予備役として年次訓練を受ける制度。階級が将校であるため、軍装は官給品以外、自前でそろえなければならなかった。そのため、ある程度の資産のある者の子弟しか志願できなかった。

少尉で退役した後、年次訓練で階級が上がったため、大正期の美術雑誌では「陸軍中尉」と紹介されている。

秋聲は動物が好きだったらしく、その中でも馬が本当に好きだったという。

（山内氏の談）

（図13）騎兵少尉時の秋聲

下の「露営之図」は日露戦役をイメージして描かれた作品だと思われる。秋聲の入隊は日露戦役終了後なので、従軍はしていない。しかし、この頃から、軍事に関する題材に興味があった事がよく分かる。



（図14）「露営之図」明治39年 鳥取県日野町所蔵

24歳、京都市立絵画専門学校（現 京都市立芸術大学）に入学、同年、水墨画を学ぶため九鬼家の祖母・利佐の紹介で松平恒夫氏を頼り、初めて渡支する。中国では、文部次郎巖修氏邸に滞在し、山座円次郎氏の推挙で北京皇室美術館において1年半にわたり東洋美術を研究し、各地の名勝古跡を巡った。当時の中国では、交通機関が未発達のため、各地を巡るのにはかなり苦勞したようだ。（神美5号4p）

秋聲は、この後も、28歳の時に2年間、北京宮廷所属宝物殿で2年間にわたり東洋古

典美術の研究をするために渡支している。のちに、妻となった緑婦人の父親が、中国で会社経営をしていた関係や、陸軍の依頼として従軍、東本願寺から慰問の依頼をうける等、渡支は生涯で三十数回にも及んだという。(100回以上という説もある)

また、当時の九鬼家の財産は相当なものであったらしい。また、九鬼家の系譜の関係で秋聲は皇族にも知遇があり、子爵の爵位を持っていた。このような恵まれた環境であったため、秋聲は俗に言う「パン絵」を描く必要が無く、海外に自由に出かける事ができ、自分の好きな題材で制作を行う事ができた。

その資産のおかげで、彼は、当時としては、相当なおしゃれをしていたし、後に左京区下鴨に家を建てた時にも、ずいぶんとハイカラで、趣味を生かした部屋を作って、生活を楽しんでいたようだ。

(2) 画壇での活躍

明治45年、27歳の時より、秋聲は日本美術協会展に出品を始める。そして、昭和3年までの十数年間で、金・銀・銅の各賞を十数回受賞している。

また、この頃より、文展にも出品を始めた。師谷口香嶠の死後、31歳の時に、山元春挙に師事、画塾早苗会に入会し、早苗会展にも出品を始めた。

大正9年には、冬季、2ヶ月間にわたり北海道を旅し、帰郷後「蝦夷地の旅から」と題したスケッチ旅行記を出版するなど、彼の好奇心の旺盛さ、旅行好きが伺える。



アイヌの女 大正時代 177.5×361.8

(図15)「アイヌの女」大正期 個人所蔵

大正8年、34歳の時に初めての渡欧。大正10年にはベルリン国立アルトムゼーム研究室で2年にわたり学んでいる。この後も、秋聲は当時としては珍しく世界各地を美術研究のため旅行している。その足跡は、イタリア、オランダ、スペイン、スイス、ハンガリーをはじめ、中近東、東南アジアに及び、のちの昭和初期には、外務省から依頼を受け、日米親善のため、カナダやアメリカでの講演活動や、カリフォルニアでの美術展に作品を出品している。

当然、これらの経験は彼の作品に多大な影響を与え、「長崎に航く」「ヴェニスに宵」「空車自語 伊太利亜所見」などの、エキゾチックな雰囲気を持つ作品も多い。



(図16) 「長崎へ航く」昭和6年 日南町美術館所蔵

彼は京都に在住しており、毎年、官展に作品を出品し、早苗会等、美術団体にも所属して制作を続けていた画家としての面もあったが、多趣味で、俳句を良く詠み、漢詩の素養も深く、文人としての活動も精力的に行っていた。また、海外に頻りに渡航し活動を行うなど、当時の京都画壇の中では、一風変わった画家として存在していた。家族の話によると、当時、自宅にはほとんど帰らず、忙しくあちこち飛び回っていたという。



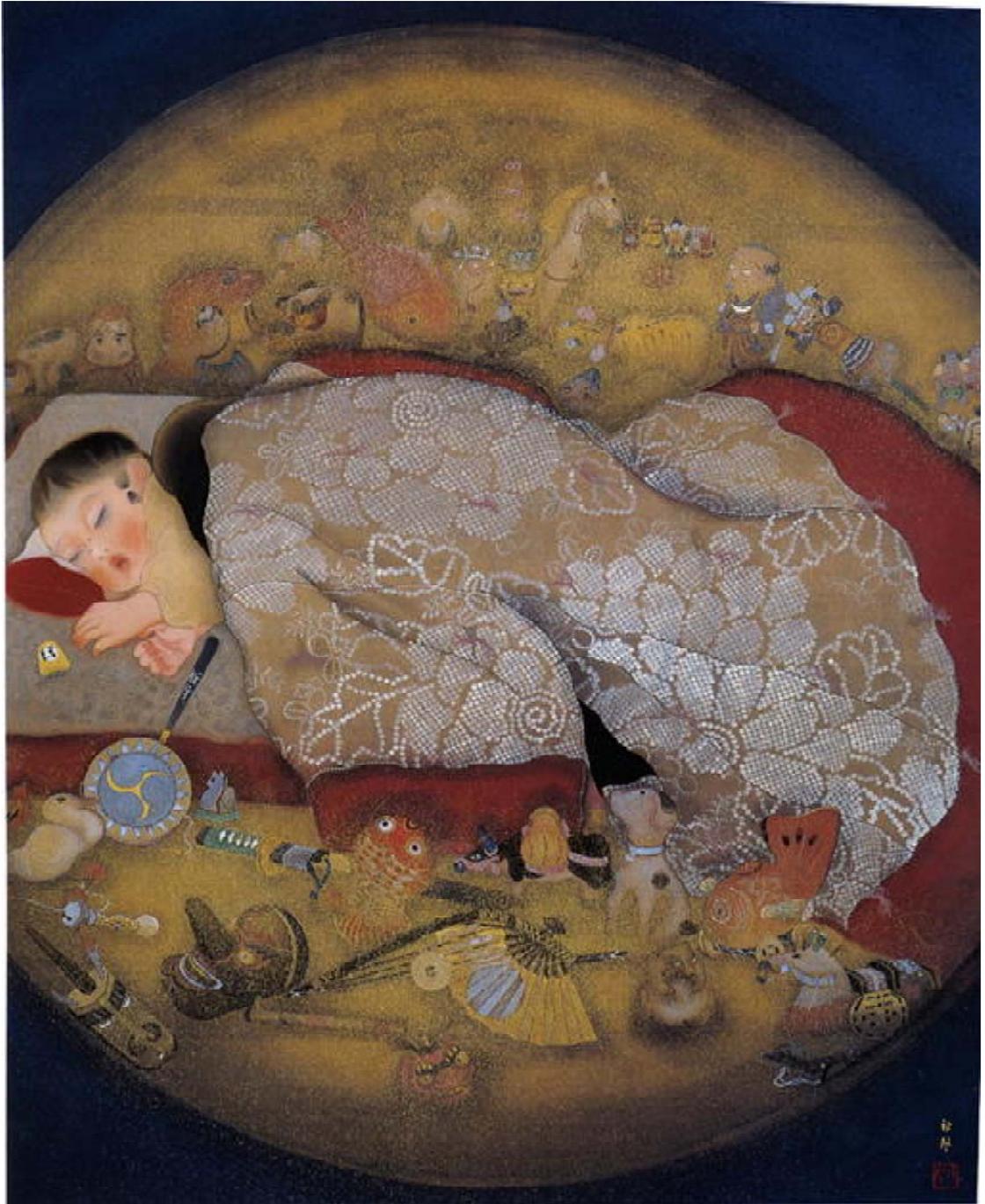
(図17) 秋聲の絵付けした茶碗
個人所蔵



(図18) 秋聲の旅行鞆
小早川隆氏（秋聲の長男）所蔵

また、彼の趣味や手がけた分野は広く、手品をすれば相当な腕前であり、役者のまねごとをやっても才能を示したという。

民芸品のおもちゃのコレクションは部屋一杯になるほどのものだった。作品の中にも「未来」「玩具」などに、そのおもちゃ達が登場している。



(図19)「未来」大正15年 第七回帝展出品作品 個人所蔵

その他には、焼き物の絵付けを行い、皇室関係者の御前での揮毫を行うなど、多才な趣味人であった。秋聲は様々な趣味の中でも特に乗馬を好んでいたという。

さらには、帝国速記学会に入会し、速記学を習得、水月甲賀流気合術の免許を習得、居合もかなりの腕前だった等、様々な特技を持っていたようだ。

秋聲の長女である、山内氏の話では、「父はとにかく生活を楽しむ人で、まさに自由人という言葉が当てはまる人でした。」と言う。

彼の官展出品を追ってみると、大正3年、29歳の時に、第8回文展「こだました後」を出品。
第9回文展「幕切れの刹那」「文殻を焼いて」出品。この年に、師である谷口香嶠が逝去している。
第11回文展「寂光の都」出品。
第12回文展「微笑」出品。
大正10年、37歳の時、第3回帝展「語られぬ悩み」出品。翌年、中国で会社経営をしていた多田仙之介の娘、緑と結婚している。翌、大正12年に京都市左京区下賀茂森前町に自宅を建てる。
第5回帝展「ヴェニスของ宵」出品。
大正14年、第6回帝展「盲目の春」出品。この年に長女が生まれている。
第7回帝展「未来」出品。
第8回帝展「万相有情 歌檜圓位」出品。
昭和3年、第9回帝展「空車自語 伊太利所見」出品。この年に長男が生まれる。
第10回帝展「惜春の宵」出品。
昭和5年の第11回帝展「愷陣」出品。推薦となる。(永久無鑑査)
第12回帝展「長崎に航く」出品。満州事変が勃発し、従軍を始める。
第13回帝展「絶目盡吾郷 成吉斬汗」を出品。
第14回帝展「護」出品。下賀茂の邸内に離れを建築し、「緑陰荘」と名付ける。
第15回帝展「護国」出品。
昭和11年、秋の文展招待展に「御旗」を出品。

自由で海外からの情報が溢れ、どこか退廃的な大正時代も終わり、昭和に入ると、だんだんとナショナリズムの高まり、不況や農村部の疲弊などで時代の空気も変わっていった。

昭和6年には満州事変が勃発、秋聲は満州に向かい、関東軍の寺内、荒木両大将の知遇を受け、勅任官待遇(将官相当)で従軍、各地の戦場を巡った。



秋聲は昭和6年夏の段階で、すでに十数度の渡支経験がある事を、宣統帝(後の満州皇帝溥儀)との対談の際に話している。

大正、昭和初期の美術雑誌に掲載された内容からも、かなりの親中派であり、中国の文化をよく知り、そして愛していた。また、根本的に、日中友好を望んでいた事がよく分かる。

また、近所の中華料理屋に行く際に、長女の和子(山内氏)は支那服を着せられたという。当時は、中国人の事を「チャンコロ」などと下に見ていた日本人の中で、山内氏は子供心にその事が嫌だったと言うが、その様子を秋聲はおもしろがっていたという。(山内氏の談)

(図20) 中国における秋聲(大正期の旅行)

そして、幾度にもわたる従軍行、時代の流れは、それからの彼の作品にも影響を与え、題材も変化していった。当然、前線の将兵を描いた作品が登場し、大正期の甘く、優しい雰囲気や漂わした画面が、構図もシンプルで、色面も厳しい画面に変化していく。古典の物語に題材を求めた作品も、北条時宗を題材にした「莫妄想」やジンギスカンを描いた「絶目盡吾郷 成吉斬汗」などの武勇を讃える題材に変化していった。

2 節 従軍画家としての活動

(1) 満州事変に従軍して

小早川秋聲は、当時の日本人としては珍しく、20歳を越えた頃から、中国をはじめ、世界十数ヶ国、ヨーロッパだけでなく中近東、東南アジアまで、旅行や美術研究のため訪れており、中国に至っては三十数回も訪問している。また、中国とドイツでは美術研究所で美術研究を行い、数年間の生活を送った。その状況から考えれば、相当な海外慣れをしていたと思われる。彼にとって、船で一晩、空路で数時間の中国や満州を訪れる事など、心理的に何の違和感もなかったのだろう。

また、35歳の時には、厳冬の北海道を2ヶ月にわたり旅行し、アメリカのロッキー山脈やスイスのユングフラウでの経験も持っていたため、満州の厳冬期における寒冷地での活動に関しても、問題はなかったと思われる。

従軍画家として秋聲は、昭和6年に満州事変に初めて従軍した。北京郊外の盧溝橋に到着した彼は、知遇のあった荒木、寺内大将に迎えられ、満州各地を従軍しスケッチを行った。そして、その他に軍事記録画を十数点、また関東軍司令部に壁画を描いた。身分は、関東軍参謀部嘱託、陸軍省嘱託、大本営陸軍部派遣の将官待遇であった。

満州国皇帝溥儀との関係は深く、溥儀の部屋一杯に龍の絵を描いたこともあったという。また、その後、昭和10年4月に溥儀が来日した際も、日程の期間中、皇帝一行を歓迎するための、様々な裏方の仕事を行った。(山内氏談)

これを皮切りに、彼はその後、昭和18年まで、軍の要請で満州、支那各地、東南アジアに何度も従軍し、訪れている。そして、帰国のたびに、従軍スケッチ展を行い、作品集を出版していった。

当時の美術雑誌には、彼の北満や支那での従軍行や、スケッチ旅行の様子が掲載されている。各地で、当地の在外公館を訪れ、大使や領事と面会するなど、その待遇からすれば、安楽な旅行を希望すれば、それなりの待遇が得られる立場にあったと言えよう。将官待遇と言え、電話一本で司令部から車が迎えに来て、佐官クラスの付き添いが付き、各地への移動は軍の飛行機が使えるほどのものであった。しかし、最前線を巡る際など、かなり厳しい旅行を自身に科している様子が描かれている。

満州事変当時は、彼以外には従軍し、作品を制作した者はほとんどいなかったため、美術雑誌には「日本画家唯一の軍事画家」という紹介のされ方をされている。

また、彼は東本願寺の衆徒であり、東本願寺からの依頼を受け、慰問のために、何度も渡支しており、その際にも、作品を制作している。

満州事変は、昭和7年に「満州国」が建国した以降も終結せず、支那事変にいたるまで、ずっと、陸軍の一部によって拡大され、熱河作戦など長城線を越えての作戦が行われていった。その期間中も、秋聲は何度も満州、北支、中支と渡支し、各地を巡り作戦に従軍していった。昭和7年には、ホロンバイル慰問、翌8年にも従軍、9年には関東軍司令部に壁画を制作するなど活発に活動している。

そんな多忙の中でも、国内では、毎年、帝展に出品しており、京都画壇において、中堅画家として活躍。独特の位置を占めていた。

それらの従軍以外にも、「満州国」との関係は深く、満州国建国を祝して「明朗の図」を献納。満州国皇帝の御前にて揮毫するなど、日本の皇室との関係もあり、満州の美術界における活動を盛んに行っていた。また、「満州国皇帝陛下御訪日記念画集」を出版、満州国外交部から100部、買い上げとなっている。

また、20代後半、北京で美術研究を行っていた時代から、中国美術界との関係も深く、昭和5年、北京国画院顧問、同年、北京の画壇人達と中日芸術協会を設立し、副会長に推されている。

秋聲は、北支派遣軍の荒木、寺内大将と親密だった。荒木貞夫はのちに陸軍大臣、近衛および平沼内閣では文部大臣を務めた。寺内寿一ものちに陸軍大臣、太平洋戦争では南方軍総司令、元帥となるなど、両名は陸軍の枢要な位置にいたため、秋聲は相当な人脈を持っていたと言えよう。また、日本の皇室と共に、満州国皇帝とかなり親密であったようだ。

昭和6年の夏、8月3日、天津において、当時の宣統帝（後の満州国皇帝溥儀）の直臣、陸宗輿の邸宅で対面している。（神美5号3～5p）その1ヶ月後の9月16日に、関東軍は奉天に駐屯軍を非常徴集し、2日後の18日に奉天郊外の柳条湖において、満州鉄道の線路を爆破、この謀略をもとに、関東軍は奉天を占領。22日、関東軍は親日政権を樹立すべく「満蒙問題解決策案」を決定、11月8日、関東軍の謀略により、天津暴動が起き、10日には溥儀は天津を脱出する。翌年、3月に満州国が成立。溥儀は満州国皇帝となった。満州事変がすでに計画されていた緊迫した状況の直前に、溥儀と対談している様子とその後の秋聲と溥儀の関係から、秋聲の陸軍との深いつながりが考えられる。



写真左から秋聲、長女の和子、（10歳）長男の隆（7歳）、妻の緑（不明）

この頃の秋聲は、朝鮮美術展の審査のために渡鮮したり、外務省からの依頼で日米親善のため渡米し講演を行うなど、この頃の彼は多忙であり、大活躍の時期であった。

（図21）秋聲50歳の時の写真（昭和10年）

(2) 太平洋戦争開戦から

また、太平洋戦争が始まってからは、昭和17年、18年と2度、陸軍の依頼でタイ、ビルマに派遣され、香港、マレー、シンガポールにも足をのびしている。

その他、日本美術家連盟会員、日展委員、日本著作権協会委員、日本文芸家協会会員なども歴任しており、大阪朝日会館で、藤田嗣治と講演会も行っている。

制作活動は大変活発であり、陸軍省の後援による2回の「聖戦美術展」にそれぞれ「日本刀」「誉の家」を出品、「軍用機献納作品展覧会」に「大地豊」、平安遷都千百五十年奉祝美術展に「出陣の前」文部省戦時特別美術展に「醜虜の面」を出品している。

また、靖国神社遊就館に10点の壁画を制作し、献納している。

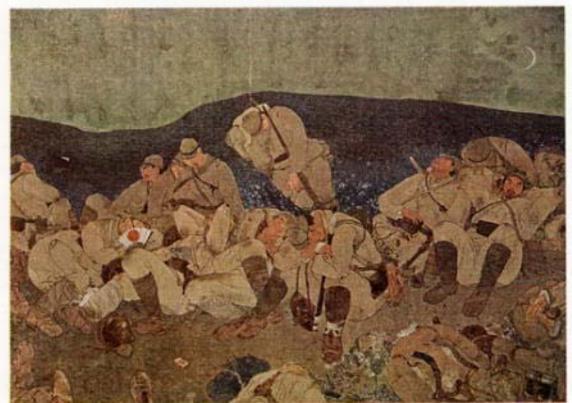
その題材としては、満州事変に従軍して以来、満州の風景、兵隊の姿や戦闘の様子を描くようになり、大東亜戦争中には、「日本刀」「戦の前」「國之楯」といった一種凄惨さすら感じられる作品が描かれた。なお、戦死した日本兵を描いた「國之盾」は、陸軍省からの依頼で描いた物だったが、完成後、陸軍省からは受け取りを拒否されたというエピソードが残されている。(芸術新潮1995年7月号15p)

また、彼の従軍行の厳しさは、零下数十度にも及ぶ、厳しい北満の地を軍用列車の貨車内にアンペラを敷いて旅をするほどのものであった。(美之国八巻2号80、81p)

彼の戦争観は、彼の従軍行の記録から読みとる事が出来る。「寒風吹きすさむ荒野の火葬にも幾度となく立会い、読経の供養もいたし、名誉ある尊き犠牲者に対して本当に真心より感謝と冥福を祈り候。・・・戦争は国家として止むに止まれぬ事とは申せ、惨の惨たるもの之あり候。昨日も戦死せし父か兄かの死体を探し当て色あせし毛布に包み背にて運ばんとせしも十三四歳の少年の細腕には余りにも重くあぐみはてし其あわれな姿を目のあたりに見し小生、其光景其心情は筆舌に尽くす可きものに之なく候。・・・世上「艱難辛苦」とか「一生懸命」なる語を徒に用い居候へども戦争する人々より考えれば余りにも無自覚な、無責任の感を覚え申候。戦争にこそ用うべき言葉の如く痛切切実に感じられ候。砂塵万丈、油汗と汚に数十日も入浴はおろか、洗面さえせぬ兵士の姿を見たる者には、涙を以て感謝いたすことと信じ候」(搭影昭和13年新年号61p)



筆氏聲秋川早小 家職軍従 つ立に雪吹



筆氏聲秋川早小 音の虫
Listening to Singing Insects By Mr Shusei Kobayakawa

(図22) 「吹雪に立つ」

(図23) 「虫の音」昭和14年

(図22) (図23) は「聖戦画譜」より引用



戦いのあと (左) 昭和10年代 181.3×119

(図24) 「戦いのあと」昭和10年代 個人所蔵



護国 (複製) 1934年 (昭和9年) 170.5×240.4 昭和11年 文展出品作

(図25) 「護国」昭和9年 秋の文展招待展出品 日南町美術館所蔵

彼の作品には兵士達の苦勞を描いた作品や、兵士達の死を悼む作品が多い。これは他の従軍画家たちが、華々しい戦闘や、兵士たちの活躍している様子を描いているのとは対照的である。

聖戦美術展、大東亜戦美術展をはじめ、他の戦時中の美術展の目録等を見ても、他の画家達の作品には、ほとんど兵士の死を悼むような作品は見受けられない。その中で、秋聲のそのような作品群は珍しいと言えるだろう。

その背後には、彼の厳しい従軍行と共に、彼が幼い頃に宗徒として東本願寺での6年間を過ごした経歴があることから、彼の宗教観に基づいている部分もあるのかも知れない。日本人のものの考え方や、文化には、仏教の伝統があり、当時、国家を挙げて神道を宣揚していたにも関わらず、多くの人々が「前世」や「来世」を信じていた事は、戦争中によく言われた「七生報国」（7度生まれ変わっても、国に報いる）といった文言からも間違いはない。当然、秋聲も三世の生命観（過去世、今生、来世）を持っていたと考えられる。そこから、「死」を西洋の文化のように捉えず、「無常」と捉えていたのではないだろうか。そして、その「無常」の中で、戦争の残酷さ、悲惨さを静かに見つめ、自分の息子と同年代の兵士達をいとおしみ、その死を悲しんだのかも知れない。彼の戦時中の作品群を、見ていく中でそのように感じる。それは、戦後の風潮のように、単に戦争の残酷さや悲惨さを訴えているものでもなく、戦闘の様子を単純に描写しただけの物でもないからだ。

多くの従軍画家たちが、日中戦争から、昭和17年までの大戦果からの熱狂的な熱情に浮かされ、戦地に赴き、取材後、国内で勇ましく戦闘の様子を描いたが、秋聲は、満州事変以来の長い従軍行の中で、戦争の残酷さと悲惨さを実際に見ていたし、十分に理解していたのだろう。ただ、彼も、当時の熱狂、国威の発揚を喜ぶ風潮には、当然、突き動かされており、「日本刀」や「出陣の前」など、日本軍の武勇を賛美し、「醜虜の面」など連合国側の兵士を軽侮する作品を描いている。

昭和19年、帰国後、委託された「大戦記録画」を完成、宮中にて上覧されている。しかし、十数度にわたる渡満、渡支、南方への従軍の結果、体調を崩し、終戦後に至るまで活動を休止する事となる。戦後、秋聲の家族が語ったところによれば、帰国した頃の秋聲の手は、凍傷の跡が相当にひどかったという。そのような厳しい従軍を経験したため、60歳を越えた彼にとって、海外への渡航と従軍は、心身共に相当の負担であったのだろう。

3節 戦後の画業

小早川秋聲は、戦時中の度重なる従軍行から、昭和19年、肺炎をこじらせ、安静治療のため、すべての美術界の役職を降した。もともと、肺と胃は弱く、医者にはたびたびかかっていたようだ。

彼は、終戦時にかなりの量のメモやスケッチを庭で焼却した。家族の話によると3日にわたって、その煙が見られたという。

戦後、彼は筆を折ろうともしたらしい。荒木大将が巣鴨拘置所に拘置され、そこから来た手紙を読んだ秋聲は、周囲が心配するほど気落ちたらしい。次々と陸海軍の将官、大臣達が有罪となっていった様子から、自分にもGHQからの追求があるものと心配しており、

捕まるくらいなら自害しようと考えたようだ。(山内氏の談)

その後、彼は神経を病み、しばらく床にふせる事が多かったという。今となっては、手紙の内容は分からないが、戦前戦中の価値観が崩壊し、あまりにも節操なく、アメリカの価値観に迎合した、当時の日本社会のありようと、親しく付き合ってきた軍人、知人達への冷遇と末路に、心を痛め、絶望を感じたのではないだろうか。

彼の故郷である山陰においても、「彼は戦時中、戦争画を描いていた」との批判があり、かなりそれには苦しんでいたようだ。ただ、家族には、「僕はいまさら、花鳥風月なんて描けないよ」ともらしている。

昭和21年、秋聲61歳の時には、日展の委員となるが、翌年、内蔵を病み、それ以降、戦前のように、毎年大作の制作に取り組み、官展に出品する事が難しくなった。

そして、満州事変以来の従軍期とは画題が変わり、観音やダルマ等の宗教的なモチーフの絵が多く見られるようになってくる。また、「干支シリーズ」と呼ばれる、色紙に描いた小さな作品を数多く描いている。



(図26) 干支シリーズ 個人所蔵



(図 2 7)「雪舟」昭和 2 0 年代 個人所蔵

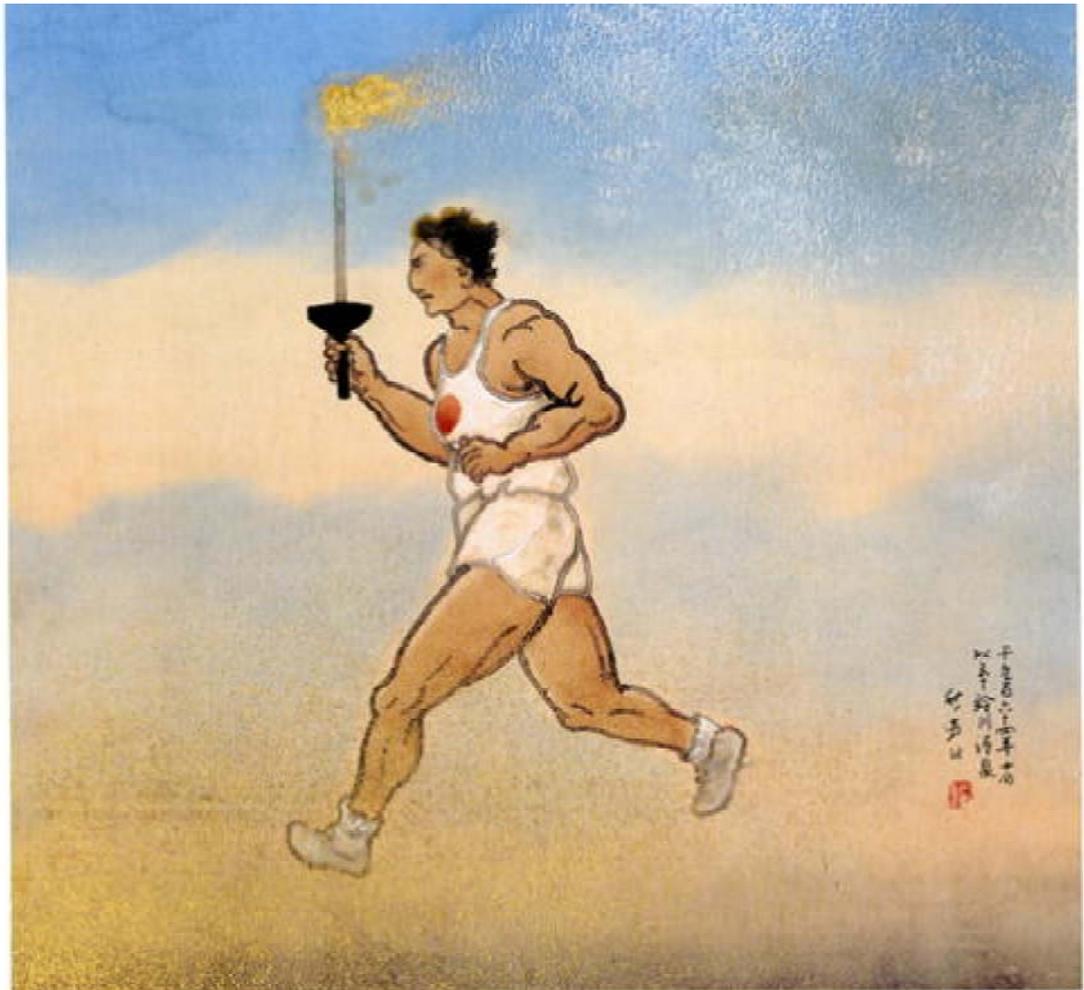
昭和 3 5 年、7 5 歳の時には、再び日本美術展委員となり、渡米を志し、京都大学キリスト教会英文科に入学している。病軀を押しての懸命な活動だったようだ。戦前、彼は日米親善のため、アメリカで講演活動を行い、アメリカの美術展にも作品を出品、受賞していた事からも、その執念が、いまだ衰えていない事を感じる。また、戦前からの知人が在住しており、活動の場をアメリカに求めていた事も考えられる。

秋聲は晩年、家族には、南イタリアに住みたいと盛んに言っていた。どうも、そちらに知遇があり、部屋も用意し、そのまま在住するつもりでいたようだ。結局、それは実現しなかったが、戦後、間もない頃、藤田嗣治がアメリカ、そしてフランスに移り、永住した事について、「うらやましい」と家族にもらしている。(山内氏の談)

老年期になっても、衰えない彼の好奇心とバイタリティには驚きを感じる。結局、彼は、それまでの海外経験と見識、その自由な性分から、日本人としては珍しい「国際人」であった。

ただ、戦後、老年期となつてからは体調不良や衰えのため、基本的に戦前戦中のように、活動できず、また、多作もできなくなっている。

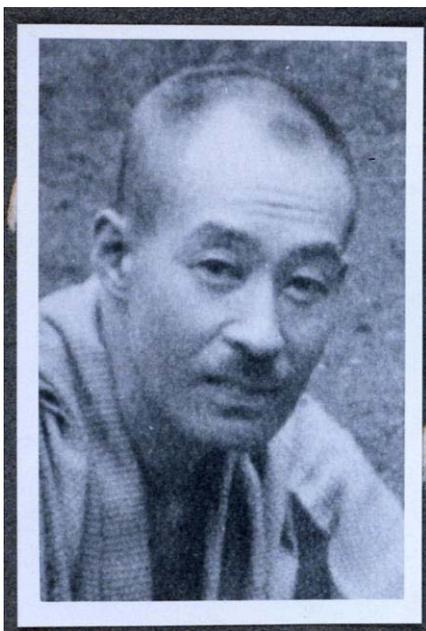
東京オリンピックの際には記念作「聖火は走る」を制作、体調は悪く安静治療が続いていた。また、大阪万国博覧会には「不動尊」を制作している。やはり彼は、国の復興と発展を喜び、誇りに思っていたのだろう。



聖火之図 1964年(昭和39年) 44.5X45.7

(図28)「聖火之図」昭和39年 個人所蔵

この作品の裏書きには「世紀の祭典 オリンピックは世界民族をして国籍と宗教を超越した大祭である 且つ国際交歓 人類の平和・・・ 誠に意義深く感激」とある。秋聲が、国際的な感覚を持ち、様々な国々の交歓を喜び、世界平和を望んでいた様子が伺える。



この当時、年齢からもかなり肉体的には弱くはなっていたようだが、毎日必ず、筆を持ち、絵を描いていた。「この絵を描く5分のために、残りの20数時間はあるんだ」と家族に語っていたという。もっともこの意味には、生活全般についてだけでなく、日本画特有の準備のための時間について（墨を摺ったり、膠を煮たりする作業）語っていたとも考えられる。

安静療養中とはいえ、秋聲はマイペースで生活を楽しみ、医者への往診を月に何度か受ける程度の病状だったようだ。

(図29) 晩年の秋聲

そして、昭和49年2月6日、小早川秋聲は老衰で89年の生涯を終える。家から病院に運ばれる際も、自分を運ぶ担架を持つ救急隊員を気遣うなど、彼は相変わらず優しく周囲に接していた。

死の前日、知人がお見舞いのためケーキを買ってきたのだが、彼は口にできず、家族に何か描く物を渡してくれるよう望んだ。ケーキを包んでいたハترون紙と鉛筆を渡すと、ショートケーキを表す三角と「あした」という字を描き、明日食べる事を知らせたという。

翌日、早朝、彼を包んでいた酸素のテントが嫌なのか、手でしきりとそれをどけようとするので、長女の和子が「お父さん、だめですよ」とそれをやめさせた。そして、その直後にすぐ、秋聲は亡くなった。和子によれば、穏やかで眠ったような表情だったという。

(山内氏の談)

それぞれ個人の人生には、「生きざま」があるように、「死にざま」があるように思えてならない。その点において、秋聲の死にざまが、穏やかだった事は、彼の人生が、そう悪いものではなかった事を示しているのではないのだろうか。

山内氏宅で取材を行った際、帯や着物に秋聲が墨で絵付けをした物を見せて貰った。その墨跡を見て感じたのは、秋聲の人となり「相当、柔らかな人あたりと、優しい心根の人物だが、すごく芯の強い人だ」という事を瞬間的に感じた。それは、論理的に説明出来る物ではないが、大体において、彼の雰囲気と人物を言い当てているのではないだろうか。

京都、下賀茂の自宅は前述の長谷川有子氏が論文を制作した平成元年当時には存在したが、現在では取り壊されていて存在していない。

(4) 年表

小早川秋聲の生涯と画業を列記し、その当時の社会の出来事とを理解しやすいようにまとめた。

小早川秋聲の主な行動と社会情勢を対比した年表

西暦	和暦	社会情勢	小早川秋聲の事跡
1885	明治 18	ハワイ移民始まる。 天津条約調印。 大日本帝国憲法発布。 (1889) 大津事件。(1891)	9月26日、鳥取県日野町黒坂光徳寺住職小早川鐵僂の長男として生まれる。出生時から9年間は母親の里である九鬼子爵邸内で育つ。本名、 盈磨 (みつまる)。
1892	明 2 5 7 歳		某南画家に四君子を習う。
1894	明 2 7 9 歳	日清戦争開戦。 下関条約調印。(1895)	東本願寺の衆徒として僧籍に入る。(明治33年まで)
1900	明 3 3 1 5 歳	義和団事件起こる。	東本願寺の勤めを終えた父とともに光徳寺に帰郷。この冬、画家になる決心をして、寺を飛び出し神戸の九鬼家に戻る。

1901	明 3 4 1 6 歳	八幡製鉄所開業。 日英同盟調印。(1902) 日露戦争開戦。(1904)	真宗大学寮（現 大谷大学）に入学。
1905	明 3 8 2 0 歳	ポーツマス条約調印。	京都の歴史画家 谷口香嶠に師事。
1907	明 4 0 2 2 歳	株式相場暴落。 ブラジル移民始まる。 (1908)	騎兵科隊1年志願兵として騎兵隊に入隊。陸軍予備騎兵少尉となる。
1909	明 4 2 2 4 歳	伊藤博文暗殺される。 日韓併合。(1910)	京都市立絵画専門学校（現 京都市立芸術大学）に入学。同年、水墨画を学ぶため松平常夫氏を頼り、中国に渡る。 北京皇室美術館で一年半にわたり東洋美術を研究。また、中国各地の名勝古跡を巡る。
1911	明 4 4 2 6 歳	各国との不平等条約撤廃。 辛亥革命起こる。	中国より帰国。
1912	明 4 5 2 7 歳	中華民国成立。	日本美術協会展に出品を始める。以後、同展において金銀銅賞を十数回受賞する。
1913	大正 2 2 8 歳		谷口香嶠自邇会展に出品。北京宮廷所属宝物殿において東洋古典美術を研究。(～大正4年まで)
1914	大 3 2 9 歳	第一次世界大戦勃発。 日本、山東省に出兵。	第八回文展に「こだました後」出品。
1915	大 4 3 0 歳	対支二十一ヶ条要求。 日貨排斥運動起こる。	第九回文展に「幕切れの刹那」「文殻を焼いて」出品。
1916	大 5 3 1 歳		1 1 月 9 日、師 谷口香嶠逝去。 1 1 月山本春挙に師事し、画塾早苗会に入会。
1917	大 6 3 2 歳	ロシア革命。 ソビエト政府誕生。	第十一回文展に「寂光の都」出品。
1918	大 7 3 3 歳	シベリア出兵。 第一次世界対戦終了。	早苗会第十九回展に「生の執着」出品。 第十二回文展に「微笑」出品。 渡欧。
1919	大 8 3 4 歳	ベルサイユ講和条約調印。	大阪真賀根美術館において渡欧記念展開催。 北海道を旅行。(2ヶ月間) 帰郷後「蝦夷地の旅から」と題したスケッチ旅行記を出版。
1920	大 9 3 5 歳	中国各地で排日運動が激化。 尼港事件報復のため、北樺太を占領。 カリフォルニア州排	美術研究のため渡欧。イタリア、オランダ、スペイン、スイス、ハンガリーなど、中近東、南アジアを外遊。 1 1 ヶ国の美術館、博物館、寺院を見学して帰国。 水月甲賀流気合術の免許修得。

1921	大10 36歳	日土地法可決、実施。 ワシントン軍縮会議。 日英同盟終了。	ベルリン国立アーツ博物館研究所に学ぶ。(大正12年まで) 第三回帝展に「語られぬなやみ」出品。
1922	大11 37歳	ムッソリーニ内閣成立。	中国で会社経営をしていた多田仙之介の娘、緑と結婚。
1923	大12 38歳	関東大震災。	5月29日、帰国。京都左京区下鴨森前町に自宅を建設。
1924	大13 39歳	米国、排日移民法実施。	大阪三越にて、個展を開催。59点を出品。 第5回帝展に「ヴェニスの宵」出品。 久邇宮智子殿下のご成婚に際し、六曲金屏風に極彩色で「薫風」と題した梅花寿仙の絵を描く。 久邇宮家へ「菩提達磨」を描く。 東本願寺の委嘱により「薫風」を描く。
1925	大14 40歳	日ソ基本条約調印。 普通選挙法成立。 中学校以上での軍事教練開始。	2月、冬心会を設立。北上聖牛、柴原魏象、山元春汀、金島桂華他12名の団体。 第6回帝展に「盲目の春」出品。 国際美術展に「祭りの日」出品。 長女が生まれる。
1926	大15 41歳	ソウルで独立を求めるデモ。 蒋介石、北伐を開始。 金融恐慌始まる。	日米親善のため半年間渡米。カナダ地方を中心に「日本美術と日本文化に関する講演会」を開催。 第一回聖徳太子奉賛展に「法華経を説く聖徳太子」を招待出品。 第3回鳥取県美術展覧会に出品。 第7回帝展に「未来」を出品。
1927	昭和2 42歳	第一次山東省出兵。 中国各地で排日運動激化。 中国共産党、南昌で武装蜂起。	第28回早苗会に「真夜中」出品。 米国日本画展に「春の訪れ」出品。 第8回帝展に「万相有情」出品 久邇宮殿下御前にて揮毫
1928	昭和3 43歳	張作霖、関東軍に爆殺される。 蒋介石が国民政府主席になる。	久邇大宮御殿に「愷陣」を描く 第9回帝展に「空車自語伊太利所見」出品 大礼記念展に「平和」出品 長男が生まれる
1929	昭和4 44歳	浜口内閣成立 世界大恐慌始まる	第10回帝展に「惜春の宵」出品 フランス政府主催国際美術展に「ひびき」出品
1930	昭和5 45歳	ロンドン軍縮会議 浜口首相狙撃される	第11回帝展に「愷陣」出品、永久無鑑査となる ドイツ政府主催国際展に「鵝」出品

1931	昭和 6	三月事件 満州事変始まる 東北、北海道で冷害	満州事変に従軍、軍事記録画を描く（将官待遇） 第 1 2 回帝展に「長崎へ航く」出品
1932	昭和 7	上海事変勃発 満州国建国 五・一五事件	満州国皇帝前にて揮毫 第 1 3 回帝展に「絶目盡吾郷 成吉斬汗」出品
1933	昭和 8	ヒトラー内閣成立 国際連盟脱退	第 1 4 回帝展に「護」出品 満州に従軍
1934	昭和 9	東北地方冷害、大凶作	第 1 5 回帝展に「護国」出品 満州事変 3 周年記念「時局スケッチ」出版
1935	昭和 10	満州国皇帝来日 北京で大規模な抗日デモ	東本願寺の依嘱で満州、北中支に赴く 「新興満州国五趣」「満州国皇帝陛下御訪日奉迎展記念画集」を出版
1936	昭和 11	二・二六事件 日独伊防共協定調印 西安事件起こる	文展招待展に「御旗」出品 朝鮮美術展のため渡鮮
1937	昭和 12	近衛文麿内閣誕生 支那事変始まる 南京占領	京都東本願寺より従軍慰問使の嘱託 北支事変スケッチ展を開催
1938	昭和 13	国家総動員法公布 張鼓峰事件 広東、武漢三鎮占領	中日芸術協会を設立、副会長となる 大日本従軍画家協会の理事となる
1939	昭和 14	ノモンハン事件 第二次世界大戦始まる	大日本従軍画家展を開催 第一回聖戦美術展に「日本刀」を出品
1940	昭和 15	チャーチル内閣成立 北部仏印に進駐 日独伊三国同盟成立	第 5 回京都市展委員となる 皇紀 2 6 0 0 年記念に九段遊就館に壁画 1 0 点を献納「大地は招く」出品
1941	昭和 16	南部仏印に進駐 東条内閣成立 ハワイ真珠湾を攻撃	第 2 回聖戦美術展に「誉の家」出品 第 6 回京都市展委員となる
1942	昭和 17	シンガポール陥落 マニラ陥落 ミッドウェイ海戦	九段遊就館に壁画 4 点を献納 陸軍省の依嘱でタイ、ビルマに派遣
1943	昭和 18	スターリングラード 独軍降伏 イタリア無条件降伏	「日本刀」を制作、陸軍省の依嘱によりビルマへ従軍、「シンガポール陥落」を国防館に展示
1944	昭和 19	マリアナ沖海戦 サイパン陥落	「國の盾」制作、「出陣の前」「虜囚の面」を出品。従軍中の疲労により安静治療する
1945	昭和 20	ドイツ降伏	

		日本、ポツダム宣言 受諾	巢鴨拘置所にて事情聴取を受ける
1946	昭和 21	東京裁判開廷 南海大地震発生 天皇陛下「人間宣言」	日展委員
1947	昭和 22	日本国憲法発布	終戦後、内蔵を病み大患する
1948	昭和 23	中華人民共和国成立 (1949)	千支シリーズの制作を始める 鳥取美術展招待「暮嶺」を出品
1960	昭和 35	朝鮮戦争(1950)	日本美術展委員となる 渡米を志し、京都大学クリスト教会英文学科に入学
1962	昭和 37	キューバ危機(1962)	詩仙堂の狩野探幽作中国三十六詩人像を復元執筆
1963	昭和 38	東京オリンピック	東京オリンピックの記念作「聖火は走る」制作
1964	昭和 39	アポロ月面到着(1969)	京都大谷大学依頼により「碩学十五師」を描く
1970	昭和 45	大阪万博開催	世界万博記念筆「不動尊」
1972	昭和 47	金大中事件 (1973)	記念作「瑞兆鷹図」に追加筆
1974	昭和 49	ウォーターゲート事件	2月6日 老衰にて京都で逝去

(上記の年表は、小早川秋聲画集「秋聲の譜」の年表、「小早川秋聲累歴年譜抄」私家版を参考として制作した)

また、文中の小早川秋聲及び家族の写真は日南町美術館所蔵